コリャーク人のライフヒストリー

——一九九五年のカムチャッカにおけるフィールドワーク資料をもとに——

E・P・バチヤーノヴァ
（訳・斎藤君子）

一九九五年三月から六月にかけて、わたしは「文化的イニシャティヴ」基金の資金援助による「コリャーク人家庭の記録」プロジェクトに基づいて、カムチャッカ州コリャーク自治管区においてフィールドワークを実施した。

調査地はチギリ区パラナ村とレスナーヤ村の二個所である。パラナ村はコリャーク自治管区における行政のセンターで、三七八一人（一九九五年の統計）が居住し、そのうちの一二五二人がカムチャッカ先住民、さらにその中の一〇六四人がコリャーク人である。後者の中にはパラナ村の海岸コリャークばかりでなく、パラナへ働きにやってきた、あるいは勉強にやってきた、さまざまな地域グループのコリャーク人たちが含まれている。海岸コリャークの集落であるレスナーヤ村の現在の人口は四九〇人、そのうちの四五一人がコリャーク人である。調査の中で一六〇のインフォメーションをテープに収録した。主なものはコリャーク人の生い立ちに関する話、親類縁者の思い出、家族や村の暮らしの中でのできごと、人生の本質や意義に関わる考えなどである。わたしはインフォーマントにできうる限りの自由を提供するよう努め、その人自身が話したいと思っていることをすべて記録し、話を特定の方向へ向けようとはしなかった。コリャークの話のかなりの部分に口承文芸（コリャーク語とロシア語による）が含まれており、老年、中年層のコリャーク人の場合は神話的意識がしっかりしているので、伝説、昔話、歌が自己感覚、自己認識、自己表現のごく一般的手段となっている。多くの人たちは伝説や歌は自分の家族や親族の所有物であり、奪うことのできない精神的財産であると考えている。インフォメーションの中には家庭内のアルヒーフに保管されている手紙、日記、一家の伝説などがあり、これらは民衆によって書き留められた文化の手本である。

全体として、収集した資料は具体的個人のライフヒストリーを再現するものであるばかりか、家族や一族、村社会、遊牧社会のライフヒストリーを再現するものでもある。個々のインフォメーションの性格や内容は話者の年齢、性別、社会的地位、気質、心理状態に左右される。情報がもっとも豊かなのは四五歳から七五歳の人たちの話で、中でもひときわ目を惹くのは伝統の継承者、民間哲学者である。彼らのインフォメーションには人名や事件だけでなく、伝統的な神話、宗教、儀礼に関する秘伝的知識がたくさん詰まっている。独特のグループを形成しているのは子供たちの身の上話である（聞

き書きはパラナ村の子供の家で行われ、ここで著者は約五〇人の子供たちから聞き取りをした）。

全体としていえることは、いずれの話でも程度の差はあれ、話者の個性、世界観、心理が垣間見え、伝統文化を含む、さまざまな様式の文化として描き出され、特定の個人による解釈が付け加えられていることである。話の中にはコリャーク人の歴史認識、歴史観が刻みこまれている。インフォーマントたちが歴史や系譜について記憶しているのは、最高で三世代ないし四世代前までである。たくさんの人名や事件を含む、歴史上独特の神話的層というものが存在していて、老年、中年世代の人びとの中にはすばらしい知識を披露してくれた人たちがいる。神話的歴史はいくつかの段階に分かれる。クトヒニャク（創造神であるワタリガラス―斎藤）以前の時代（生命の始まり）、始祖クトヒニャクの時代、およびクトヒニャク以後の時代である。クトヒニャクの時代の出来事の大部分は彼の創造行為に関するもので、そこで語られることは、始祖がトナカイ、魚、昆虫、海の動物を創造し、コリャークたちに狩猟の仕方を教え、さまざまな民族を創り、コリャークの多くの習俗や儀礼、たとえば死者を火葬にする儀礼を考案したといった類のことである。「クトヒニャクの時代に」という概念はたしかに、相対的なものである。というのは、年配のコリャーク人の中には、クトヒニャクが現在も生きていると考えている者がいるからである。「おれたちは彼にまつわる話をしているが、彼はそこに座って、おれたちのことを笑っている」[1]。クトヒニャクが汽船や電気などを創造したという話もある。こういった伝説を伝えるときに近代的な観念や用語を用いるということは、いわば過去と現在を入れ替え、できごとを時間の枠外に置くことである。「クトヒニャクはあらゆる獣、鳥、虫を集め、彼らにこういった。『おしまいだ。こんな暮らしはもうたくさんだ。ペレストロイカをやるべきときがきた』」

「クトヒニャク以後」の時代にまつわる話というのは、主人公であるコリャークが敵（多くの場合、チュクチャ）と戦う内容の伝説である。これらの話では現実のできごとが幻想的なできごとと錯綜している。

コリャークの説話においては、話者自身、ないしは話者に近しい人が関与した事件や、証人となった事件を通して現実の歴史が説き明かされる。その事件というのは主にソビエト時代のできごとで、集団化政策、大祖国戦争、戦後のコルホーズ時代の生活に関することである。集団化時代というのは人びとの記憶の中では富農追放、住民の移住（「ソビエト権力から逃亡した」）、大量検挙と結びついている。大人のインフォーマントの約三分の一が一九三〇年代から五〇年代にかけ、彼らの親類縁者が受けた弾圧について物語った（この時期に関するコリャークの口承の歴史において、これほど大量の証言が集められたのははじめてである）。以前（一九八四年から八五年にかけて）、わたしがカムチャッカで記録した生い立ちに関する話の中には、弾圧に触れたものはひとつもなかった。

たいへんおもしろいのは、尾行、逮捕、尋問に直接関与した人びと、当時監獄や収容所で警吏や通訳として働いていた人びとの思い出である。たとえば、レスナーヤ村の古い住民の一人で、一九四〇年代に民兵として働いていた男性から、一九四〇年代初頭カム

チャッカにおいて、いわゆる「ラムート人（エヴェン人の旧称―斎藤）の陰謀」の「摘発」によって多数の人びとが逮捕されたこと、およびカムチャッカにおける社会主義建設の積極的な寄与者であり、ラムートの事件に巻き込まれてこの時期に銃殺されたエヴィヤルに関する興味深い情報が記録された。ソビエト時代に植え付けられた階級意識、階級的他者恐怖症は今日でも若干の人びとに特徴的に認められる。彼らは一九二〇年代から四〇年代にかけて権力によって行われた、階級の敵根絶の政治の正当性を確信している。シベリア先住民の一部では、伝統的に、ロシアの官憲に勤務することは名誉なことであり、土地の名士の特権とみなされてきた。インフォーマントの中に、自分の親族が「密告者」や護送兵として働いたことをいくぶん誇らしげに伝えた人が何人かいたのはそのためだろう。

戦時中の思い出は困難辛苦、困窮、過酷な労働、飢餓、病気、そして勝利によってもたらされた大きな喜びに関するものである。戦争の時期はこの土地の住民の心に愛国主義的感情が形成される上できわめて重要な段階であった。

戦後の数十年については大半の人が、幸福で平穏な暮らしだったと語っている。多くの人がコルホーズが存在した時期をほのぼのとした気持ちで思い出している。「わたしはコルホーズ時代を覚えています。あれはわたしたちの村のいちばんいい時代でした。わたしたちはひとつの家族のように、すばらしい生活を送っていました。一九五〇年代の終わりのことです」（N・N・シヴェリナ、一九五一年生まれ、レスナーヤ村）。それと同時に、多くの人びとにとっては、この時代は将来性の見込めない集落を廃村にするという国家的キャンペーンが展開された、悲劇的出来事と結びついている。コリャーク自治管区ではこのキャンペーンの中で五〇以上の少数民族の集落が廃村になり、住民たちは他の土地へ移住させられた。全体としていえることは、わたしたちが聞き取りをした人たちの、ソビエト時代に対する態度は矛盾している。一方では、住民の一部に社会主義をもっとも公正な社会制度として美化する観念が認められ、他方では、ソビエト時代は権力によって行われた弾圧の過ち、トナカイの共有化、集落の廃村と結びついている（この場合、ソビエト政権はロシア人の政権と同一視されている）。特筆すべきことは、ほぼ全員がソビエト政権に対し、国内の秩序を保っていた政権として、程度の差はあるが、尊敬の念を抱いていることである。ペレストロイカ以後の時代については、話者の圧倒的多数が不満を表明し、失業（レスナーヤ村には公式に登録されている失業者が百人以上いる）、賃金の遅配、住民の多くがアルコール依存症に罹っていること、国営農業や国営企業の崩壊、犯罪件数の増大、人びとの孤立化を憂えている。多くの人がソビエト連邦の崩壊を悲劇として受け留めている。こうした絶望的な気分、現政権に対する不満の声が聞こえる例を挙げよう。パラナ村の七五歳の住民が書いた自伝的物語である。「ソビエト時代、コムニストたちの時代には、わたしは満足のいく暮らしをし、高等教育を受けた。ところが今、ひどい貧困、極貧の中で一生を終えようとしている。たったひとりのわたしの子供である娘は空き瓶を拾い集め、それを食品コンビナートへ持っていって、その金でパンを買っている。着るものがなく、病院へ行くのが怖い」。

カムチャッカ先住民の貧困状態はアルコール依存症の増加によって、いっそう深刻化している。コリャーク自治管区の僻地にある集落では、もっとも必要な商品が供給されず、小麦粉、砂糖、挽き割り粉がきれるといった事態がときどき起きるのに、大量のアルコール飲料が持ち込まれ、商店に限らず、土地の商人からも、二四時間いつでも好きなときにそれを買うことができる。教師を含め、他の土地からやってきた人口のかなりの部分がアルコール飲料の半合法的商いに従事している。実業家たちはツンドラを走り回り、トナカイ飼育者や猟師からウォッカと交換にトナカイ肉や毛皮を手に入れる（トナカイ一頭がウオッカ一、二本）。先住民たちは「飲み疲れると」しばしば集団で、集落こぞって、（アルコール依存症患者として―斎藤）登録してもらうために医療施設へ出かける。一九九四年には、人口八四七人のセダンカ村で一八〇人が登録されているが、これはこの村でアルコール依存症に苦しんでいる人の数にはほど遠い。自治管区の行政当局は先住民の登録に特別の資金を割り当てている（アルコール飲料の搬入を規制するより「登録」に支払うほうがはるかに安上がりなのだ）。この対処法は望むべき成果をもたらさないことが多いにもかかわらずである。なぜなら、よそ者の医師たちの手であっさり処理されていて、一定期間かけて治療することをしないからである。悲劇的な「アルコール事件」がわたしのインフォーマントたちの話の中に絶えず出てくる。それと同時に、大部分の話から感じられることは、ペレストロイカとともに精神的開放感が訪れたことである。その証拠が、世界観、宗教、古い習俗、儀礼に関する大量の情報である。ソビエト時代にはそういったことが話題になったとしても、それはとうの昔に過去のものになっているといわれていた。シャマンやシャマニズム、呪術、妖術、儀礼的殺人（老人の自発的な死の儀礼）、儀礼的性転換などにまつわる話がそれである。

聞き取りをした大人の三分の一がシャマンの話をした。一九八四年の情報とは異なり、一九九五年の話ではこの現象に対する肯定的評価が優勢だった。「シャマニズムは生きています。霊魂が空を飛ぶのです。他人がそれを自分のものにしようとしても、できません。それに値しないからです。シャマンになるためにはすべてを守らなければなりません。してはいけないことはしてはいけないし、必要なことはしなければならなりません。シャマンは秩序、疫病、罪を監視してくれているのです」（M・T・エトネウト、一九二九年生まれ、パラナ村）。シャマンにまつわる話の内容は病人の治療、シャマンの行う奇跡、シャマンたちの試合、妖術師や悪霊との戦いに関するものである。その中で大きなグループを形成しているのは、ソビエト権力とシャマンの逃走にまつわる話で、勝者になるのは常にシャマンである。たいへん面白いのは、シャマンとの交わりの中で得た個人的印象に関する話、自分自身で巫術を行った人や行っている人の話、彼らがこの宗教的行為の中で体験した感覚についての話である。たとえば、パラナ村の国営農場の四二歳の住民で、一族に数人のシャマンがいて、当人も「試してみよう」と決心した男性は自分の感覚を次のように伝えている。「わたしの体は下に残っていて、わたし自身は上空へ飛んでいった。びっくりして戻ってきたが、それからわたしは病気に罹ってしまった。自分の肉体をひとり

にしておいてはいけない。横でだれかが太鼓をたたき、肉体から悪霊を追い払っていなければならない」。

シャマンの家系の歴史を再現する話がたくさんある。コリャークの家庭では現在でも女性がシャマニズムを行う。年配のコリャーク人女性のほとんどが自分や家族の病気を治療するために手太鼓を用いる。手太鼓をたんなる楽器としてではなく、神具として扱う伝統が残っている。手太鼓とその所有者は精神的に一体化している。一九五五年の春、レスナーヤ村の病院でコリャーク人のおばあさんが死の床に就いていた。亡くなる少し前、彼女は親類たちに向かい、彼女の手太鼓が置いてある、隣りのキンキリ村へだれか行ってほしいといった。「わたしが生きている間にわたしの手太鼓を壊しておくれ。わたしは死ねないんだよ。あれがわたしの邪魔をしているんだ」。この話をわたしにしてくれたのは亡くなったおばあさんの娘さんである。ふつうは人が死ぬと、手太鼓はその人のもとへ送られる。そのための特別な儀礼がある。

コリャークの話には人びとが自然と一体化しているという自覚が認められる。その場合、個々の氏族グループ、家族、個人は自然界との独特の、自分にのみ固有の結びつきを感じている。たとえば、レスナーヤ村のヤガーノフという氏族グループは自分たちを雷と結びつけている。M・T・エトネウトは自分と自分の親族について次のように述べている。「わたしの氏族は熊、大気、火と結びついています。わたしの父は大気です。大気というのは雪、雨、虹、霧、空間です。父の妹は大地です」。何人かの話者は自分と自然とがあたかも完全に一体化したかのような感覚を体験したと語った。「ときどきじっと横になっていると、自分が大きな石になり、おだやかな、軽やかな息をしているような気がする。だって、石というのはなめらかで、その息はすごくおだやかで、行動もすごくおだやかだから」。

どの自然現象も、物質さえも、だれかの崇拝の対象になりうる。その際注目を惹くのはコリャークの、即興による儀礼的、宗教的催しの多様さである。崇拝の対象となる物質とのつきあい方やその性格は、その物質の選択と同様、多くの場合、個人の心理的特質によって決まり、その人の状態、気分に左右される。そういった儀礼上の即興作品のひとつの例がコリャークの一集落に住む六六歳の女性の誕生祝いである。たまたまわたしはその場に居合わせた。誕生日の日付自体、マリアが勝手に選んだもので、彼女は自分の誕生日の年月日を正確には知らなかったが、家の守護霊と「相談」の結果、六月一日に祝うことに決めたという。この祝いごとの主人公の住まいはこの日、いつになくきれいに飾られていた。部屋の中央に熊の毛皮が敷かれ、そこにネックレスやさまざまなビーズ飾りで飾られた雌熊の頭が置かれていた。雌熊の口には青々としたアイヌネギが差し込まれていた。頭の前にはごちそうのはいった器が置かれていた。毛皮の上にはアビ（水鳥―斎藤）の人形（マリアの説明によると、「曽曽祖父」から継承したもの）、火おこし板と石とビーズを束ねたギチ＝ギー、それから皮袋、アニャペリ（占いに用いる石―斎藤）、スプーン、その他、いくつかの「神具」がある。その中にはだれかからプレゼントされた、海外のみやげ物の木彫りの熊もある。背後には聖像画や親族の写真が並べられている。毛皮の端にはごち

そうの入った四枚の皿が置かれ、細かく刻んだ干し草と兎のにこ毛が部屋中にばらまかれていた。わたしともうひとりの年配のコリャーク人女性が部屋に入ると、この家の主婦はわたしたちを毛皮の方へ案内し、雌熊の頭を持ち上げて指差し、こういった。「これはわたしなのよ、兎さん（マリヤの氏族では熊をこう呼び習わしていた）。わたしの誕生日を祝っておくれ」。わたしといっしょにやってきた女の客は頭に向かってお辞儀をし、頬ずりをした。わたしも同じようにした。頭を元の場所に置いて、壁からこの家の主婦の手太鼓をはずした。手太鼓の内側には古ぼけた蜘蛛の人形が結わえ付けられていた。マリヤの説明によると、「蜘蛛は『生命のはじまり』に人びとに光明を与えてくれたので、敬わなければならない」のだ。マリヤが台所で奮闘している間、客のコリャーク人女性は手太鼓を打ち、お祝いの主人公を具象化している雌熊の頭に捧げる歌をうたった。あとでマリヤが説明したところによると、彼女はかなり以前から自分を雌熊だと感じていて、山やツンドラを歩いていると、自分の頭が熊の頭になっている気がするという。この雌熊の頭は二年ほど前にたまたま彼女のところへやってきたもので、彼女はこの頭と話すうち、頭が彼女の父親の宿営地から彼女のところへきたこと、頭は長年彼女を探し、やっと彼女を見つけ出したことを知った。そんなことがあってから、マリヤは自分の誕生日をこの雌熊の頭とともに祝うことに決め、自分が死んだら六月一日に今回と同じようにお祝いをしてくれるよう、息子に遺言した。この種の儀礼的、宗教的な即興の催しはコリャークにとって伝統的なものである。

宗教上コリャークが伝統的に崇拝の対象としているもので今も残っているのは、岩、曲がり角、山、川の石、ワモンアザラシの群棲地など、いわゆる「聖なる場所（タインノト）」である。人びとはそうした場所へ贈り物をもっていく。ビーズ、布の切れ端、殺した獣の毛皮を掛けて供えるのである。猟師たちはそうした場所に実弾や木製の矢などを置いてくる。現在でも犬やトナカイの儀礼的殺害が行われている。口承文芸の中では人間を生け贄にする場面も見られる。

供犠などの宗教的セレモニーにしばしば先行するのが夢のお告げである。夢や幻はコリャークの宗教生活上、重要な役割を果たしており、危険を予告してくれる魔除けであるとされている。家庭内の時間の過ごし方のひとつが夢占いである。夢や幻にまつわる話はたいへんおもしろく、コリャークの口承文芸の中でまったく研究されていない部分である。これらの話はその大部分が詩的感動にあふれている。「あるときわたしはわたしたちのところの山を夢に見た。そこの岩の上で女の人が暮らしているらしい。女が扉を開くのが見える。わたしが彼女の方を見ていると、『わたしはずっとあなたを見ています。あなたがわたしにリボンやビーズの贈り物をもってくるのを。若い人たちの中にはわたしのことをなにも知らない人たちもいます』。わたしは彼女にこう答える。『わたしがみんなにあなたのことを話しましょう』」。幻は彼岸の国と接触する一形態であると解釈されていて、妖術師の世界や死者の世界などへ渡ることを可能にしてくれる。独特のグループに属する幻は、カムチャッカ先住民が古くから向精神薬として用いているベニテングタケの服用によっ

て生じる幻覚である。ベニテングタケ崇拝の要素は今も見られる。ベニテングタケに対して象徴的な敬意が払われている（ベニテングタケの発見者は歌をうたったり、踊りをおどったりしなければならない）。ベニテングタケの服用にあたっては厳しい掟が定められている（残念なことに、掟は必ずしも守られるとは限らない）。若いときにはじめてベニテングタケを服用するときは年長者の指図で行われ、ときとしてイニシエーションの性質を帯びる。ベニテングタケの主な使命は、人びとに死者と交流することを可能にすることである。「これは魔法の食べ物として、ふたつの世界の生活を結びつけている」。三回のカムチャッカ調査旅行中、わたしはベニテングタケについて、伝説や昔話を含めて約五〇話を記録した。話者の多くはベニテングタケを服用したときの感覚や、「ベニテングタケの影響で」見たり聞いたりした幻覚について、詳しく話してくれた。

時の循環、死後における再三の復活という伝統的観念が起因しているのは、死んだ祖先たちが彼らの生活の中に絶えず存在していて、事件やシチュエーションに影響を与えているといった感覚である。死者たちと「火を介し」、お守りである石の力を借りて語り合い、彼らに届け物を送り、助言を求める。赤ん坊がこの世に生を受けたあとに必ず行う儀礼としては、祖先の中のだれが再生したのか（ひとりの赤ん坊の体内に一度に何人かの性の異なる死者たちが再生することがありうる）、どういう名前でこの世へ現れたのかを特定する占いがある。赤ん坊が病気になるのは間違った名前が選択されたせいだと説明されることがしばしばあり、占いをし、古老たちと相談して、赤ん坊に新しい名前をつける。

口頭であるか文書であるかにかかわらず、多くのインフォメーションには本質と意義、生と死に関する哲学的思索が含まれている。そこには時と生の循環に関する伝統的観念と、その連綿性に関する非伝統的観念とが混在している。後者においては、生とは宇宙に人間が永遠に存在する、最初の段階であるとみなされる。「生とはコミッション、点検、遊びのようなもの」であり、死とは実在を認識し、神に近づく、ひとつの重要な段階である。「死んではじめて、人生とはなにかがわかる」。

わたしのインフォーマントたちの話の中で明確に究明されているのは、善と悪に関する観念である。これらの概念の解釈には伝統的見方とキリスト教的見方がからみあっている。ソビエト時代のイデオロギー保持者の場合は、これに悪名高い階級的アプローチが加わる。伝統的に悪は妖術、嫉妬、悪口と同一視されている。「悪い人間はあつかましくて図々しく、他人を笑い、妖術を使う。嫉妬深い人も妖術師と同じだ」。伝統的観念における善とは悪との戦いである。女性の務めのひとつに、悪霊や悪人から家族を守ることがあった。悪から守ってくれるものとしては、さまざまな呪具（アニャペリ、アリュチなど）がある。悪、妖術を予防し、緩和する手段とみなされているのは兎の毛やワモンアザラシの脂などである。パラナ村の年配の女性住民のひとりは村の中を歩いているときに、たくさんの悪が周辺に潜んでいて、その悪が人びとに悪いおこないをするようにそそのかしているのを見ると、兎の毛の小さな塊を通りにばら撒いて、必ずその悪を緩和するように努めるのだとわたしに語ってくれた。多くの人びとの道徳観にはキリスト教の影響がはっきり

と認められる。とくにそれが顕著なのは海岸に居住するレスナーヤ村のコリャーク人の場合であり、教会の本を集団で読むことが今でも娯楽のひとつになっている。レスナーヤ村の多くの人は積極的に善行を積む心構え、悪に報いるに暴力をもってしない心構えを両親から受け継いでいる。「母はわたしにこういった。『人には必ずいいことをしなさい。たとえ人がおまえに悪いことをしても。人の言葉に耳を貸してはならない。自分の良心のいうことだけを聞きなさい。わたしたちが貧しい暮らしをしていても、みんながわたしたちのことを覚えていてくれるように』」。相互扶助の伝統、病人や貧しい人の面倒を集団でみる伝統、さまざまな点で精神的に清廉を心がける伝統のある、レスナーヤ村共同体の生活スタイル全体がキリスト教の教義の影響を反映している。自分がキリスト教を受容したことについて語ってくれたインフォーマントは大勢いた。この点で注目に値するのは四三歳の、あるコリャーク人女性の話の一断片である。「夫は酒を飲みます。わたしはときどきすごく腹を立てて、夫になにか悪いことをしたくなります。でも、福音書を手にとって読みながら、考えます。『主よ、光栄あれ！　主がおいでになり、わたしを真実の道に立たせ、わたしが悪いことをするのをお許しにならない』って」。レスナーヤ村の人びとの中には、彼らの集落に教会があって、聖職者がいた時代を体験している人がいる。ソビエト時代に教会は破壊され、住民の一部は今もこの出来事を悲劇として受け留めている。しかし、コリャーク人（特にトナカイ飼育者）の中には戦闘的異教徒が残っていて、正教に対して否定的態度、ときには敵対的態度さえとる人たちがいる。近年、アメリカの宣教師たちがカムチャッカにおいて積極的に活動している結果、コリャーク人の間にプロテスタントが普及しつつある。

コリャーク人の話を聞くと、この民族の情緒面での生活の特徴がいろいろとわかってくる。コリャークの伝統文化においては、感情を表す様式はかなり厳しく規制されていて、季節や一日の時間、具体的な状況、性別、その人の社会的地位によって制約を受けていた。たとえば、家庭内でけんかをしたときに、妻は手を振り回して夫の方を見てはならなかった。妻の怒ったまなざしが「獣をびっくりさせ」、夫だけでなく、男の子孫何世代かにわたって狩猟能力を失わせると考えられていた。笑うこと、泣くことに関するタブーがあった。たとえば、夜中や、死者を墓地や火葬場へ送っていくときに、死者を悼んで泣くことは禁じられていた。「だれの手がおまえの涙を拭うか、知れやしない」からだ。「罪な笑い」という概念がある。自然の中での笑い、とくに山中における笑い、食べ物と関係した笑いなどがそれである（谷地坊主や山が自分たちのことを笑っていると思うかもしれない）。これらのタブーを破ると、疫病や死などといった災いを招くとする信仰が流布している。感情を抑えずに表に出すことが許されるのは祭日と、クトヒニャクにまつわる、こっけいな物語を語ったり、聞いたりするときだった。このような儀礼的セレモニー（昔話の語りも演劇的所作を伴う、独特の儀礼であった）の場では、コリャークたちの笑いの文化を多面的に見ることができた。レスナーヤ村に住む四五歳の女性の思い出によれば、両親が昔話を語ったり聞いたりするとき、まるで子供のようにはしゃいでいたことに彼女はいつも驚いていた。彼らはロシア人が卑猥だと

思うようなことをけろりと、じつに自然に口にした。昔話文化の伝統は今日まで残っている。

コリャークの情緒面の暮らしについて語るとき、彼らの音楽文化に触れないわけにはいかない。すでにS・P・クラシェニンニコフが指摘しているが、カムチャッカの先住民は「音楽に対する偉大な才能」をもっている。このすばらしい天賦の才は現代コリャーク人の特徴でもある。彼らの場合、精神面、情緒面での自己表現の一方法として歌と踊りがある。ほとんどのコリャーク人には自分個人の歌があり、それがない場合でも、その人の内部で生きていて、まだ生まれ出る時が訪れていないだけである。歌の誕生についてレスナーヤ村に住む四四才の女性は次のように語っている。「母が以前、わたしにこういいました。『コリャークにはそれぞれ自分の歌があるんだよ。体内にあって、いつかおまえの前に姿を現すときがくる』。わたしもそのことを確信しました。その歌が現れたのは、わたしの人生に不幸なできごとが起き、わたしが最悪の状態にあったときでした。わたしはその歌がわたしの内部で誕生したことに気づきさえしませんでした。ところがわたしの体内から外に飛び出そうとしはじめたのです。わたしはまる一日歩き回りながら、なにやらもごもごいっていました。すると母がわたしにこういうのです。『カマールカ（聖なる山）へ行って、あそこで歌ってごらん。もしその歌がおまえを救ってくれたら、それはおまえの歌ってことだ。おまえはその歌といっしょに暮らしていくことになるんだよ。おまえはつらいときにその歌をうたうことになるだろう。ひとりでうたうのさ。さあ、お行き』。わたしの歌はこうして生まれたのです。自分の歌がない人は、踊りの中で自分の胸のうちを表現します。これがわたしのところへやってきたのも最近のことです」

コリャークの話には人間の肉体、解剖学的構造、生理に関する伝統的観念が映し出されている。自分自身の肉体の各部を生きものとして扱う伝統が残っていて、それらに腹を立て、怒る。特徴的なのはある老人の話で、左腕が何度か彼のいうことを利かないことがあったという。自分の足を占いに用いる人がいる。目、指、髪の毛、爪はコリャークにおいては（他の多くの民族においても）呪具とみなされている。たとえば、左手の小指と薬指を組むと、妖術をかけられるのを防ぐことができると考えられている。便や尿も同じようなまじないになる。女が赤ん坊を乳で育てることをいかにしておぼえたかを伝える伝説、そして月経の起源にまつわるたいへん興味深い伝説が記録されている。コリャークには現在も月経崇拝が生きている。「地中や火の中に月経を捨ててはいけない。月経にはずかしめを加えてはいけない。月経は不死の娘で、きれいな女なんだ。彼女がいなくなってしまったら、人間は永遠に存在しなくなってしまう」。年配のコリャーク人女性たちの伝えるところによれば、「彼女が女のもとを永遠に立ち去ろうとするとき、女たちは健康のため、家族のため、一家に健康を残していってもらうため」、顔と体全体を経血で洗い浄める。

以上、一九九五年にわたしがコリャーク自治管区において記録した、コリャーク人たちのライフヒストリーに関する話をいくつか紹介した。この概説の中で引用した資料の他にも、コリャークの家庭（一夫多妻の家庭や異民族間結婚による家庭を含む）における世代

間、異性間の関係、コリャーク人社会における犯罪や暴力、祭礼などに関する情報が含まれている。一九八四年、八五年、九五年のカムチャッカにおけるフィールドワークで収集した資料に基づいて、一連の論文やモノグラフを準備する計画である。個々のモノグラフにおいては個個人を取り上げ、口承、書承によるさまざまな形式の自己表現を分析するつもりである。

日本語訳にあたって

斎藤君子

当論文は一九九五年に書かれたもので、カムチャッカ先住民が自分たちの歩んできた歴史をどのように認識しているか、神話が彼らの自己認識をいかに強烈に規定しているか、伝統的世界観が日常生活にどのような形で根づいているかといった問題を扱ったもので、極北民族の精神文化をめぐる現状と、ロシアにおける最新の研究動向を知る上で、きわめて示唆に富んでいる。

ロシアではペレストロイカと社会主義体制崩壊を機に、伝統文化とその研究をめぐる状況に大きな変化が生じていることは本誌でもすでに論じられている。[2] 社会全体が急激な変貌を遂げている現在、民衆の伝統的観念や意識にどのような変化が現れているかを知ることはロシア口承文芸学の今日的課題である。

モスクワの民族学人類学研究所に所属するE・P・バチヤーノヴァは当論文の他にも、すでに一連のきわめて興味深い論文を発表している。[3] 彼女は「老人送り」儀礼、新生児の殺害、シャマニズム、花嫁の略奪、男性の性転換など、伝統文化の中の、いわば負の要素に光を当て、ソビエト時代の公式見解ではすでにとうに消滅したはずの古い習俗の中に、実は現在も住民の間でひそかに行われているものがあることを明らかにし、その根っこにある死生観、倫理観からそれらの儀礼を説明している。「老人送り」については拙論「カムチャッカ半島における伝統文化としての老人殺し」（『なろうど』第三九号所収）を参照されたい。

バチヤーノヴァが聞き取り調査の中で数多くの貴重な証言を得ることができた一つの理由はペレストロイカにある。ペレストロイカ以後、民衆の間に急速に精神的開放感が広がり、人びとはそれまで口を閉ざして語ろうとしなったことを語りはじめた。しかし、法律上は犯罪である老人殺しや、他民族の目には奇習と映る性の倒錯といった微妙な問題に関してまで、彼女が話を聞き出すことに成功したのは、ペレストロイカの恩恵だけではないだろう。先住民の文化に対する、彼女の真摯な姿勢が、ともすれば重くなる住民の口を開かせ、彼らが胸の奥にしまいこんでいたものを吐露させたに違いない。当論文で述べられているように、彼女は「インフォーマントにできうる限りの自由を提供するよう努め、その人自身が話したいと思っていることをすべて記録し、話を特定の方向へ向けようとはしなかった」という。一見効率の悪い仕事のようだが、結局はそういう彼女の謙虚さが大きな収穫をもたらしたといえる。聞き取り調査に出かけると、限られた日程内に少しでも多くの成果をあげようとし、あらかじめ膨大な質問事項を用意しておいて、インフォーマントに会うや否や、相手の気分や健康状態におかまいなく、矢継ぎ早に質問を浴びせかけるといった、一方的、暴力的調査をしがちであ

る。彼女の姿勢や研究方法には学ぶべきものが多い。

注

(1) E・P・バチヤーノヴァ著「コリャーク人の民族的自覚における古い要素—シベリア諸民族における宗教の初期形態」『第三回ソビエト・フランス・シンポジウム資料』ペテルブルグ、一九九二年、一一頁から一九頁。

(2) 斎藤君子「『生きているむかし』誌創刊に見るロシア口承文芸学の動向」第十九号。熊野谷葉子「ロシアの『ポスト・フォークロア』」第二十二号

(3) 「極北東諸民族の若干の古い習俗」Народы Севера и Сибири в условиях экономических реформ и демократических преобразований. М., 1994;「シベリア極北東諸民族における性転換の習俗」Социально-экономическое и культурное развитие народов Севера и Сибири: традиции и современность М., 1995;「コリャーク人の目から見たロシア人とロシア的なもの」Этнические стереотипы в меняющемся мире. М., 1998